第８　ノーベル文学賞作家・莫言との対談
（２０１１年７月２６日）（『がんばったで！４０年』２頁～１４頁掲載）

１．乞う、ご期待！７月２６日に中国人作家・莫言と坂和弁護士が対談！（事務所だより第１７号　１１年盛夏号）

１．中国人作家・莫言（モウ・イエン）とは？
作家・大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したのは１９９４年。スウェーデンのストックホルムで開催された受賞式で、彼が今後ノーベル文学賞に最も近い作家と挙げたのが、山東省高密県の農村で１９５５年に生まれた中国人作家・莫言だ。中国映画の素晴らしさを一挙に世界に知らしめた第１弾は陳凱歌(チェン・カイコー)監督が１９８４年に発表した『黄色い大地』。第２弾は張藝謀(チャン・イーモウ)監督の１９８７年のデビュー作で、莫言の『赤い高粱』を原作とした、『紅いコーリャン』。同じ張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『至福のとき』（０２年）も莫言の『至福のとき』が原作だし、香川照之が出演した霍建起(フォ・ジェンチィ)監督の『故郷の香り』（０３年）も、その原作は莫言の『白い犬とブランコ』だ。農村に生まれ、１９６６年に人民解放軍に入るまで農村で貧しい生活を送った中国の「農民作家」に注目したＮＨＫは、大江健三郎が莫言を訪問する旅を企画し、０２年４月ハイビジョンスペシャル『農村の生命を描く』と題する１時間番組を放映した。莫言は０６年に福岡アジア文化賞を受賞する他、『酒国』『豊乳肥臀』『至福のときー莫言中短編集』『白い犬とブランコー莫言自選短編集』『白檀の刑』『四十一炮』『転生夢現』『牛　築路』等の出版を精力的に続け、その最新作は今年５月出版の『蛙鳴』。
２．作家・毛丹青(マオ・タンチン)との交流は？
日中バイリンガル作家、毛丹青と私との本格的交流が始まったのは、０８年４月に開催された「中国人気作家『蘇童(スー・トン)』が行く関西の旅　歓迎座談会」への出席から。以降、①『取景中国』出版に向けての、上海旅行（０８年８月)、北京・上海旅行（０９年３月)、②『取景中国』出版と広報のための上海ブックフェアへの出席（０９年８月)、中国中央電視台（ＣＣＴＶ）が『華人世界』で毛さんを密着取材した中での私の１分間だけのＣＣＴＶデビュー（？）（０９年８月)、③『華東理工大学外国語学院』での対談（０９年９月)、④『定遠号プロジェクト』の始動（１０年３月）に伴う大連・威海・青島旅行（１０年３月）と広がった。最新のプロジェクトは、０９年４月から神戸国際大学教授となっている毛さんのゼミの学生たちが中国語に翻訳した『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい！』を中国語版で出版すること。既に翻訳は完了しているが、来年の２０１２年が日中国交回復４０周年にあたるため、それに向けて出版しブックフェアに参加することを目指している。

３．莫言と坂和の対談が！

毛さんは９９年に莫言が小説『豊乳肥臀』の翻訳刊行を機にはじめて来日した時、通訳として全日程に随行した人。したがって、上記のＮＨＫの番組でも莫言と大江健三郎の通訳を務めるとともに、莫言が希望した０４年の北海道旅行へ随行する等、大江健三郎を含む３人は公私共にお友達だ（写真①）。そんな毛さんの尽力で今夏、莫言が日本を訪問することになったが、その「特別企画」として７月２６日（火）に実現することになったのが、毛さんを通訳とする莫言と坂和との「対談」だ。莫言は温泉が大好きなので、昼間の坂和Ｌ／Ｏでの対談終了後、有馬温泉の会員制リゾートホテルに赴いて共に温泉に浸かり食事をし一泊しながらより濃密な（？）対談を続ける予定だ。私は『紅いコーリャン』『至福のとき』『故郷の香り』の映画評論を書いているが、原作を読んだことはなかったため、急きょ彼のたくさんの作品を読破中。大学時代の「文学青年」（？）に戻って、しっかり莫言文学の真髄を理解し、対談に備えたい。その詳細は、事務所だより新年号をお楽しみに。

写真①
０２年４月ＮＨＫハイビジョンスペシャル
『農村の生命を描く』取材時の写真
（毛丹青氏提供）

（写真左から、莫言、大江健三郎、毛丹青）

２．莫言文学のご紹介～『蛙鳴（あめい）』（２０１１年５月、吉田富夫訳、中央公論新社）（事務所だより第１７号　１１年盛夏号）

莫言の最新作『蛙鳴』は４７６頁の大書。そこで描かれるのは、中国の「一人っ子政策」の恐るべき姿だ。オタマジャクシは作家である主人公・万足（ワンヅー）のペンネームだが、男性の精子の形もオタマジャクシだから、そこにはどんな意味が？山東省高密県で農民の子として生まれた莫言には、蛙鳴（蛙の声）は見馴れた農村風景の中での耳になじんだ声。もう一人の主人公である「伯母」が「取りあげばば」を排し、近代的医術を駆使して取り上げた赤ん坊の数は１万人にものぼるらしいが、他方で違法な妊娠をした女たちの身体から無理矢理（？）堕胎させた赤ん坊の数は？「文化大革命」や「下放」の悲劇も描かれるが、女性が子を孕むことの意味やそれを堕ろすことの罪深さ、そしてそれに関わる男や役人たち、さらに中国共産党の政策の問題点が重厚な文体から浮かびあがり、人間の営みの喜怒哀楽がひしひしと伝わってくる。

こんな「重い」小説は、大学時代に読んだ高橋和巳の『邪宗門』（６５年）以来。読破には相当の覚悟とエネルギーが必要だが、今夏ひとつ挑戦してみては・・・。

『蛙鳴（あめい）』（２０１１年５月、吉田富夫訳、中央公論新社）

３．中国人作家・莫言との対談は？有馬温泉での温泉談議は？（２０１１年７月２６日～２７日）（事務所だより第１８号　１２年新年号）

１．事務所だより第１７号盛夏号で予告したとおり、７月２６日、アジアで最もノーベル文学賞に近い中国人作家と言われている莫言との対談が実現した。読売新聞による公式の日本訪問の合間にこれを企画したのは、今や坂和の「好朋友」となった神戸国際大学教授の毛丹青。今回は①坂和総合法律事務所での午前中の公式対談の他、②大阪天満宮の斜め向かいで、日本初のノーベル文学賞作家・川端康成生誕の地にある料亭・相生楼での昼食会、③超豪華なリゾートホテル・エクシブ有馬離宮にゆっくり一泊し、夕食時はもちろん、莫言の大好きな温泉に浸かっての温泉談義（？）と盛りだくさん。さてその成果は？

２．毛丹青から６月９日午前８時頃にかかってきた電話によって企画が決まった後、坂和は急遽“文学おじさん”に変身！莫言原作の映画は『紅いコーリャン』（８７年)、『至福のとき』（０２年)、『故郷の香り』（０３年）の３本を観て評論していたが、原作本は読んでなかったため直ちに莫言の著書を買い求め、まずは最新作『蛙鳴』を家系図を作成しながら読破。続いて『赤い高粱』、『白檀の刑』上下、『牛　築路』とメモを作りながら読み進んだが、『転生夢現』上下と『四十一炮』上下は残念ながら途中まで。しかし坂和事務所恒例の７月２５日の天神祭パーティーを中止してまで猛勉強した甲斐あって、直前には各種のレジメと資料が完成。頭の中が莫言作品一色となった状態で対談に臨むことに。(写真①②)）

写真①　日本で出版された莫言の小説

写真②　対談風景

３．１９５５年に山東省高密県の農村で８人兄弟の末っ子として生まれた莫言の子供時代は、飢えと孤独がテーマ。中農だった莫言一家は１９６６年から７７年まで続いた文化大革命の中で苦しい思いを。７６年に人民解放軍に入った莫言は８５年から作家活動を開始。張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『紅いコーリャン』（８７年）によって、一躍莫言の名前も世界中に知れ渡った。その後次々と続く大作の発表に世界はビックリ！そんな莫言との対談は①坂和の莫言作品に対する評価や質問に始まり、②坂和的中国電影評価③日中文学作品評価④作家と弁護士との感性の異同⑤毛丹青を含めた３人が生きてきた日中の時代変

遷の中での問題意識のあり方、等々多岐に及んだ。これらはすべてＶＴＲとＩＣレコーダーで録画・録音しているので、折りに触れて公開していきたい。約２時間の対談後は、①記念写真の撮影②莫言からの書の贈呈③サイン会を経て終了。実に有意義な対談となった。（写真③④）

写真③　著書にサインする莫言

写真④　莫言直筆の書を持って

４．「相生楼」ではまず川端康成生誕の地と刻した石碑の前で記念撮影。古式豊かな料亭にふさわしい松花堂弁当を食べながらもいろいろと盛りあがった。（写真⑤⑥）

写真⑤　相生楼で２人並んで

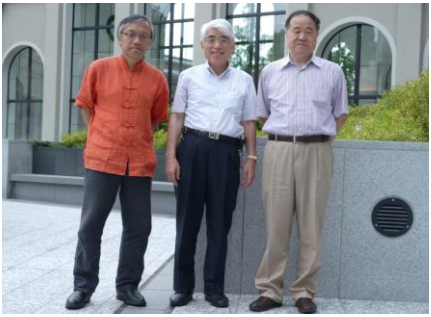
写真⑥　３人で記念写真を

５．夜の有馬離宮での話題の中心は、①７月２３日に中国の温州で起きた高速鉄道脱線事故の報道②その賠償処理についての弁護士としての坂和の見解、となった。毛丹青自慢のアイパッドによれば、この鉄道事故について莫言や毛丹青がツイッターの中国版「微博」で発言すれば、その反応は数万～数十万件に上るらしい。午前中の公式対談はもちろん、有馬離宮での温泉あがり談義がツイッターにのれば、たちまちそれが中国全土をかけめぐるわけだ。その影響力を考慮しながら、３人の温泉談義はいつまでも・・・。（写真⑦⑧）

写真⑦　有馬離宮のバルコニーで

写真⑧　深夜まで激論を

６．翌朝もゆっくりと露天風呂に浸り、バイキングの朝食を食べ、チェックアウト。その後、有馬離宮内で記念撮影をした後、有馬温泉街の散策へ。狭い路地ではまず毛と猫、莫言と猫などの芸術写真（?）を。続いて極楽寺や太閤橋等で記念の２ショットを。これにて約１時間がアッという間に過ぎ、あとは特急バスで一路大阪へ。その後莫言は京都駅にて読売新聞社担当者のお迎えを受けて、東京での講演会に臨むことに。(写真⑨～⑫)



写真⑨　有馬離宮の中庭で

写真⑩　散策中ネコと戯れる莫言

写真⑪　極楽寺の前で

写真⑫　太閤橋の前で

４．毛丹青老師と坂和の共同作業あれこれ！
ノーベル賞作家・莫言との対談までの毛丹青老師と坂和の共同作業を振り返って！（事務所だより第２０号　１３年新年号）

　０８年当時１０冊以上の著書をもち、８００万人のアクセスがあるブログをもつ、日本在住２０年のバイリンガル作家が１９６２年北京生まれの毛丹青氏。０８年３月に友人の紹介でそんな有名作家と出会い、雨の中を自転車で行きつけのちゃんこ屋へ。個性的で濃いキャラ（？）を互いに嗅ぎつけあい、書くことが大好きという共通点でたちまち２人は大の親友に。

　まず最初のイベントは、０８年４月２日に開催された「中国の人気作家『蘇童』が行く関西の旅　歓迎座談会」。その懇親会で私は弁護士稼業との２足のわらじをはく映画評論家として紹介され、『シネマ５』が配布されることに。その後出版、講演会、ブックフェア等々、２人の共同作業は次々と広がり莫言さんとの対談も！以下「２人の共同作業あれこれ」を振り返ってみると、以下の写真のように盛りだくさん！

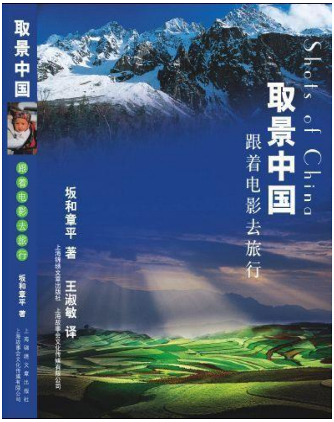
１．蘇童座談会（０８年４／２）　……………………………写真①～④
２．『取景中国』出版に向けて打ち合わせ開始　…………………写真⑤～⑩
３．『取景中国』出版　上海ブックフェア（０９年８／１８）　……写真⑪～⑭
４．大学での対談・共同講演あれこれ　…………………………写真⑮～⑱
５．ＣＣＴＶデビュー！（０９年１０／１１）　…………………写真⑲、⑳
６．定遠号プロジェクト（１０年３／１５）　……………………写真㉑、㉒

１．蘇童座談会（０８年４／２）

写真①　毛丹青の司会で

写真②　蘇童と２ショット

写真③　中国人女優の田原と２ショット



写真④　この本の出版に向けてゴー！

2．『取景中国』出版に向けて打ち合わせ開始

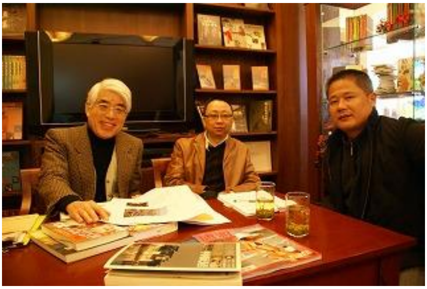
（1）上海で夏青根らと打合せ（０８年８月）

写真⑤　上海文芸出版社での打合せ

写真⑥　豪華な夕食とお酒を前に、次々と議論が

（2）北京・上海で打合せ（０９年３月）

写真⑦　張藝謀（チャン・イーモウ）に縁の深い陈小东の北京事務所で対談



写真⑧　デザインの打合せもバッチリと

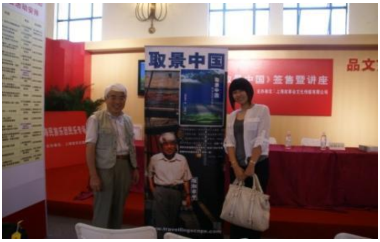
（３）プロのカメラマンによる表紙用写真撮影

写真⑨　０８年８月、上海の田子坊

写真⑩　０９年３月、北京の下町

３．『取景中国』出版　上海ブックフェア（０９年８／１８）

写真⑪　上海ブックフェアの盛況ぶり



写真⑫　ブースでＴＶキャスターと

写真⑬　毛丹青氏と対談

写真⑭　サイン会風景

４．大学での対談・共同講演あれこれ

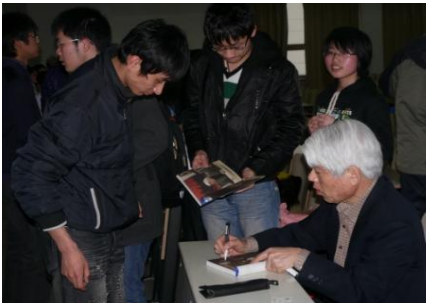
（１）華東理工大学外国語学院（０９年９／１８）

写真⑮　毛教授と対談

写真⑯　対談終了後のサイン会

（2）大連理工大学（１０年3／１４）

写真⑰　参加した大勢の学生たち



写真⑱　講演終了後のサイン会

５．ＣＣＴVデビュー！（０９年１０／１１）

毛丹青を特集したＣＣＴＶの３０分番組『華人世界』が０９年１０月１１日に放映。その中で坂和も１分間だけＣＣＴVデビュー！

写真⑲　ＣＣＴＶの『華人世界』に

写真⑳　ＣＣＴVにアップで！

６．定遠号プロジェクト（１０年3／１５）

威海は日清戦争激戦の地。清国の北洋艦隊が誇る巨大戦艦「定遠号」をめぐる旅に。さて今後の展開は？

写真㉑実物大の定遠号

写真㉒電光掲示板の「歓迎坂和章平先生」に注目！

５．莫言さん　ノーベル文学賞受賞おめでとう！
（事務所だより第２０号　１３年新年号）

１．２０１２年9月１１日の尖閣諸島の国有化宣言以降、日中関係は冷え込んでいる。そんな中、毎年１０月中旬に発表されるノーベル文学賞については、日本の村上春樹と中国の莫言が有力視され、新聞紙上では『文学賞では日中対決？』の文字も躍った。世界最大のブックメーカー（賭け屋）「英ラドブロークス」のオッズ（賭け率）では、村上春樹がトップで莫言は二位だったが、フタをあけてみると・・・。張藝謀監督の映画『紅いコーリャン』（８７年）には大きな衝撃を受けたが、その原作小説が莫言の『赤い高粱』だ。

２．０９年４月以降神戸国際大学教授となっている毛丹青氏との共同作業は前記のとおりだが、そんな毛丹青氏プロデュースによって２０１１年7月２６日には坂和ＬＯにおいて、アジアでもっともノーベル文学賞に近い作家、莫言との対談が実現した（写真①②）。

写真①　毛丹青の通訳で対談

写真②　２人で固い握手を！

３．その日に向けて私は莫言の小説『赤い高粱』（８６年）、『白檀の刑』（０３年）、『四十一炮』（０６年）、『転生夢現』（０８年）、『蛙鳴』（１１年）、『牛　築路』（１１年）を人物関係図や年表などのメモを作成しながら次々と読破するとともに、対談用の詳しいレジメと資料を準備した。その結果、毛丹青の通訳による約３時間に及ぶ対談は実り豊かなものとなった。また莫言からは自筆で「和風」と大書したうえ、「坂和章平先生は奇人」（これは、いい意味！）と書いた書をプレゼントしてもらった。さらに私が購入した本には一冊一冊丁寧にサインしてくれたから、その誠実さにも感激！（写真③）

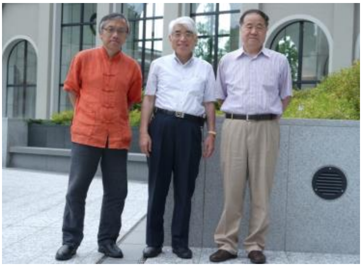
写真③　次々とサイン中の莫言

写真④　川端康成ゆかりの「相生楼」入口

４．対談後は川端康成生誕の地にある料亭「相生楼」で昼食を済ませた（写真④⑤）後、温泉の大好きな莫言の希望どおり有馬温泉へバスで移動。超豪華な会員制リゾートホテル「エクシブ有馬離宮」に泊まり、毛さんと３人で夜遅くまで「温泉談義」を展開し、翌朝は有馬温泉街散策に（写真⑥⑦⑧）。

写真⑤「相生楼」の座敷に

写真⑥　エクシブ有馬離宮で深夜まで議論



写真⑦　翌朝、エクシブ有馬離宮の中庭で

写真⑧　太閤橋の前で

５．そんな私としては今回の受賞は最高の喜びだ。莫言さんおめでとう！そこで「事務所だより第２０号（新年号）」は１６頁の特大号とし、毛丹青氏との共同作業を振り返るとともに、莫言対談の様子を貴重な写真を交えてお伝えするとともに、莫言文学の真髄を少しでも皆さんにお伝えしたい。

莫言文学の解説と莫言ＶＳ坂和対談のポイント

第１　莫言文学についての坂和の問題意識

１．農民性、土着性

１）１９５５年に山東省の高密県生まれ、育った環境は中農

２）時代の流れ―小５の時退学

１９６６～１９７７年　文化大革命
１９７６年　人民解放軍に入隊
１９７８年　改革解放政策
１９７８年　北京電影学院再開
１９８２年　第１期生卒業
１９８５年　作家デビュー

３）いつも動物が！そのウエイトが大きい

４）小説の舞台はいつも山東省高密県！（＝農村）

２．莫言文学の特徴

１）時代背景とテーマ

２）言葉づかい、文体など

３）主人公、登場人物（登場動物？）

第２　坂和からの質問事項

１．莫言の生活は？価値観は？人生観は？

Ｑ１　８人兄弟の末っ子。小５のときの退学は？

Ｑ２　６６～７７年の文化大革命の影響は？

Ｑ３　文革中の飢えとは？孤独とは？

Ｑ４　改革解放政策（７８年～）、天安門事件（８９年）の影響は？

Ｑ５　読んだ本は？その影響は？

水滸伝、三国志などごく一部。しかし、祖父の語りによる民話や伝説多数。幽霊や妖怪で頭がいっぱい。

２．人民解放軍での文芸活動（７６年２１歳）から作家デビュー（８５年３０歳）までに、どんな文学の影響を？

Ｑ１　莫言にとっての外国文学の影響とは？

ｅｘガルシア･マルケス『百年の孤独』（８５年）、川端康成『雪国』『伊豆の踊り子』

Ｑ２　なぜ中国人は川端康成が好き？

第３　円熟時代（長編小説を次々と執筆）（００～１１年）

Ｑ１　川端康成は短編小説の名手。三島由紀夫も当初はそう。莫言もそうだったが、ある時から（超）長編に！それはなぜ？

Ｑ２　長編には構想力が大切（ｅｘ『カラマーゾフの兄弟』『戦争と平和』『大地』など）。莫言の構想力はどこから生まれるの？

Ｑ３　小説の生命は主人公のキャラクター（ｅｘサリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』、『罪と罰』のラスコリニコフなど）

①『赤い高粱』の余占鰲のキャラの原型は誰？

②『牛 築路』の楊六九（隊長代理、墓堀り）、白蕎麦（豆腐売り）、回秀（ニラ売りの少女）、老劉（豚の面を買った男）は？

③『白檀の刑』の孫丙、眉娘、小甲、銭丁（県知事）、趙甲（処刑人）は？

④『転生夢現』の西門鬧、藍解放、藍瞼、西門金竜、西門宝鳳は？

⑤『四十一炮』の羅小通（肉小僧）は？

⑥『蛙鳴』の万足（オタマジャクシ）、万心（伯母、産婦人科）は？

Ｑ４　動物の扱いは？音の扱いは？

第４　中国の現代文学と作家をどう評価？

１．張藝謀監督の『紅夢』の原作など、莫言と並ぶ大作家、蘇童は？

２．坂和の大好きな『ブッダと結婚』（０５年）、『衛慧みたいにクレイジー』（０４年）の「七〇后」の衛慧は？

３．中国人作家として初めて芥川賞を受賞した『時が滲む朝』（０８年）の楊逸は？

（毛丹青も坂和も評価が低いが・・・）

４．６２年生まれ、天安門事件を体験、９２年台湾で出版、本土では発禁、現在ロンドン在住、『裏切りの夏』の虹影は？

５．６０年生まれ、『活きる（活着）』の原作者で、『兄弟　上＜文革編＞、下＜開放経済編＞』（０８年）の余華は？

６．『水の彼方』（０９年）の「八〇后」の田原は？

第５　映画化された莫言文学（坂和評論）

１．『紅いコーリャン（紅高粱）』（シネマ⑤７２頁）

１９８８年第３８回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞し、『紅いコーリャン現象』をひきおこした、張藝謀の第１回監督作品。タイトルどおりの赤を基調とした色彩美とコーリャン畑、コーリャン酒を生かしたストーリー構成は出色！日本軍の出現が悲劇的な結末を生み出す衝撃的な作品だが、「中国の山口百恵」と呼ばれた鞏俐（コン・リー）を見出したことにも、この映画の大きな意義が・・・。

２．『至福のとき（幸福時光）』（シネマ⑤１９９頁）

急速に近代化が進むまち大連。そしてこのまちでリストラされ結婚もできない負け組の中年男。そんな中年男と盲目の美少女との間で展開される何とも荒唐無稽な「騙し合い」。しかしそこには本物の心が。そして善意の仲間たちに囲まれて過ごす「至福のとき」が。張藝謀（チャン・イーモウ）監督の「しあわせ３部作」の完結編はホントに最高。

３．『故郷の香り（ 暖 ）』（霍建起（フォ・ジェンチイ）監督）（原作『白い犬とブランコ』）（シネマ⑰２６４頁）

「どうしても観たい映画」がある。タイトルと監督の名前とスチール写真を見ただけで「これは！」と思ってしまう映画。それがこれ！「ふるさと」「１０年の後」「初恋の女性」――ありふれた題材だが、それをホントに感動的に描くことができるのは、中国の、それもごく一部の監督しかいないだろう。オーバーラップしながら静かに流れていく１０年前のストーリーと現在の姿……。今更どうしようもないことはわかりながらも、いやそうだからこそ、やはり感動！　映画ってホントにすごい芸術だと思わされてしまうこの名作は超お薦めだ！